

レファレンス コーナー 住居・住宅・住まい ——アジア——

横瀬美保

三日野宿したら働く気力をなくすという。これは日本のホームレスの話だが、住居は人が人らしく生活するために必要な要素の一つであることには間違いない。

人々は土地の環境、気候、習慣、家族構成、職業、所得、宗教などに合わせて様々な住居を造り、それは時代とともに変遷を重ねている。日本でも伝統的な住居は欧米風の家屋やコンクリートの高層住宅へと姿を変えてきた。

近隣の国々の人々はどうのような住居に暮らし、それはどう変化しているのか。アジアの国々の住居・住宅・住まいに関わる当館所蔵の日本語資料を紹介する。

堀井健三・大岩川敏編『「すまい」と「くらし」——第三世界の住居問題』（アジア経済研究所 一九八九年）は、アジア、中東、アフリカ、ラテンアメリカ、オセアニアの二八カ国にわたる住まいの実情について、現地に長期滞在した経験を持つ研究者が執筆している。補章に明治期の日本の貧困層居住地区の記述がある。穂坂光彦著『アジアの街 わたし

の住まい』（明石書店 一九九四年）は、インドネシア、インド、タイ、フィリピン、ベトナム、スリランカ、韓国のスラムに暮らす人々とその住居を紹介し、都市居住政策やコミュニティの活動についても報告している。

広い国土に多くの民族が住む中国では住居の多様性はいうまでもない。ロナルド・ゲリー・ナップ著・菅野博真訳『中国の住まい』（学芸出版社 一九九六年）は、洞穴住居から竪穴式住居、地上の住居へ、建築形態の移り変わりを追ひ、中国人の家に對する思想、風水、家相などについても解説している。

今も人の住んでいる洞窟住居を紹介した記事「黄土高原に点在する洞窟住居」が『エネルギーレビュー』二〇〇三年五月号（エネルギーレビューセンター）にある。

漢族の伝統的家屋建築である四合院住宅については、谷村英彦編『東アジア伝統的都市空間の現代化における空間制御技術に関する研究』（二〇〇二年 空間制御技術研究会）でよくわかる。

現代の集合住宅については、上北恭史著『中国の住宅における空間構成原理の持続と変容 集合住宅の住まい方を通して』（上北恭史 一九九七年）が詳しい。

包慕萍著『モンゴルにおける都市建築史研究 游牧と定住の重層都市フフホト』（東方書店 二〇〇五年）は、中国北部の内モン古における住宅

を含む建築と都市の歴史の変容を取り上げている。

韓国では植民地時代に日本人のために日本式の住宅が建てられた。鄭銀淑著『韓国の「昭和」を歩く』（祥伝社 二〇〇五年）に韓国各地に残る日本家屋が数多く紹介されている。

出口敦編著『アジアの都市共生』（九州大学出版会 二〇〇五年）の第五章「都市居住空間にみる異文化——韓国・鎮海市における日式住宅の変容」には現在韓国人が住まいとしている住宅が掲載されている。

『韓国における住宅建設および木材需給調査報告書』（日本貿易振興機構産業技術・農水産部 二〇〇五年）では、現代の高層アパートや木造住宅の様子を知ることができる。

『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第二巻第一号（二〇〇五年）にある山崎古都子執筆「韓国の住宅事情」では、現代の住宅の記述に加えて伝統的建築の住宅にも言及している。

東南アジアに目を移してみると、布野修司著『インドネシアにおける居住環境の変容とその整備手法』（学位論文 一九八七年）では、主に都市部のカンボンと呼ばれる居住地の住宅を調査し、諸民族の伝統的住居についても詳述している。

森下恒夫著『タイの住宅・居住概況』（住宅・都市整備公団建築部 一九九五年）には、一九四〇年代から一九九〇年代までの住宅の概況がある。

田中麻里著『タイの住まい』（圓津喜屋 二〇〇六年）では、首都バンコクの住まいの類型化、農村の住居と建築儀礼の地域性、また最小限の設備のコアハウスを供給し、居住者にその後の建設を委ねるコアハウジングなどについて綿密に分析されている。

ノーマン・エドワーズ著・泉田英雄訳『住まいから見た社会史——シンガポール 一八一九～一九三九（日本経済評論社 二〇〇〇年）』は、シンガポールにイギリス植民地が開かれてから第二次世界大戦までに建設された、主にヨーロッパ人のための一戸建て住宅を扱っている。

マレーシアについては、『地域学研究』第一七号（駒澤大学応用地理研究所 二〇〇四年三月）に川本豊和執筆「半島マレーシアにおける住宅団地の開発と多民族居住——ジョホール州クランのタマン・インタン低価格住宅地区を事例として」の論説がある。

南アジアの例として、斎藤千宏編著『NGOが変える南アジア』（コモンズ 一九九八年）の第二章「住民によるスラムの改善」にはスリランカの都市における低所得者住宅の居住環境改善の経過が記されている。最後に、本誌『アジア研ワールド・トレンド』二〇〇六年八月号でフォト・エッセイ「竹でできたスラム——バングラデシユ」が見られる。

（よこせ みほ／アジア経済研究所図書館）